九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

訛形の定着 ： ブラジル日系人の言語調査から

原口，裕
静岡女子大学文学部助教授

https://doi.org/10.15017/12125

出版情報：語文研究. 39/40, pp.21-24, 1975-06-01. 九州大学国語国文学会
バージョン：
権利関係：

訛形の定着

――ブラジル日系人の言語調査から――

原口　裕

一

比況の助動詞といわれる「みたいだ」が現代語法を最も特徴的に示す用語の一つであることはよく知られている。その事例の活字に見えるのは明治二十年代の当初であるが[1]、最近では、活用語接続の推定の用法を含めて、地の文を問わずさかんに使用されるようになった。そのため、頻度の最も高い連用形には、形容詞連用形に類推した「みたく」の訛形が発生し、関東から静岡にかけての子供のことばではよく聞かれ――静岡では大人の間でも時に聞くことがある――国語教育の上で問題になることも珍しくない。この形容動詞語幹の形容詞活用派生が、一般的な推移の一面を示すものか、地方の限られた方言的現象にすぎないのかは、まだ十分な調査報告がないように思われる。

筆者はたまたま機会を得て、ブラジル国サンパウロ大学文学部日本語科[2]でブラジルの大学生に日本語を教えているのであるが、ブラジル日系人社会の日本語に関する小さな実態調査を試みているうちに「みたく」の事例の少なくないことに気がついた。教育やマスコミによる言語規制の弱いこの国の日本語社会は、訛形の定着に関して一つのサンプルを示すように思われる。以下、「みたく」の使用についての調査の結果を例示して、大方の参考に供したい。

二

この調査の対象は、サンパウロ大学日本語科に学ぶ学生のうち、祖父母、両親が日本人（二世を含む）であるもの七九名（一世八名、二世六二名、三世九名、質問に答えられない学生は省いてある）である。いわゆる二、三世の日本語能力についてはすでに野元菊雄氏に調査があり、その一部は発表されてもいるが[3]、甚だ悲観的な将来が述べられている。この学生等の日本語能力も個人差があって、必ずしも高い水準にあるとは言えないが、市井における二世間の日本語能力を基準にすると上の部に属するとすることができよう。ただし、自宅で日本語を主として使用しているものは一世をのぞくと皆無に近かった（調査では三名）。

彼等の方言的環境を示す調査の一例をあげると次のごとくである。

(1) 水が［　　］こまる。(Tenho problemas por falta de água.)

ポルトガル語を併記し、空欄に「出ないから」もしくはその類型を記入させる質問である。

a でらんから　7　　h でらないから　3
b でらんけん　6　　i でないから　23
c でらんので　4　　j でないので　27
d でらなくて　4　　k でなくて　27
e でんから　14
f でんけん　5
g でんので　7

否定の表現に「ん」を多用する傾向は野元氏の調査にあるがここではその勢力は二対一で「ない」系が強い。「でなくて」が最も多い型の一つであることからも、学習の影響が考えられる。「ん」系では「でらんから」「でらんけん」「でんけん」「でらんので」がほぼ同数という結果を示していて、方言使用の家庭環境の反映が見られる。「ん」系「ない」系をともに答えて〈ゆれ〉ている型は、

a—i　2、　e—i　3、　c g—k　1
g—k　2

右のごとくで、その数は多くない。やはり学習の影響が強いことを示している。方言の型は西部のそれであろう。

三

いわゆる形容動詞語幹で末尾の母音が「イ」である語が形容詞化するケースは、次の例文によって調べてみた。

(2) この花はきれいくない。(または、きれくない)
(Esta flor não é bonita.)

質問に答えた型は、

a 使ったことがある　12　　b 聞いたことがある　6
c 使ったことも聞いたこともある　24
d 聞いたことがあり、変な感じがした　10
e 聞いたことがない　4
f 聞いたことがない。変な感じがする　2
g 変な感じがする　4

右のごとくで、「聞いたことがない」例ははるかに少ない。とくに「きれくない」の短呼形を指定したものが8名いて、この形容詞型が定着しつつある状態がうかがえる。末尾母音が「イ」で終る形容動詞語幹は、否定表現を伴うような頻度の高い語形では、容易に形容詞化する環境にある。ここでは、同形の使用を見せる、例えば静岡方言の影響のごときは考慮しなくてよいと思われる。

「みたく」についての例文と、その質問の結果は次の通りである。[4]

(3) あの人は学者(a)みたく　(b)みたくに　(c)みたいく　話をする。(Ele fala como um erudito.)

(4) あの人は酔っぱらっている(a)みたく (b)みたくに (c)みたいく 歩いている。(Aquela pessoa está andando como se estivesse bêbeda.)

(5) あの人は風邪を引いて、熱がある(a)みたく (b)みたくに (c)みたいく 見える。(Ele está gripado e parece estar com febre.)

例文		聞いたことがある	使っている
(3)	aみたく	11	4
	bみたくに	2	
	cみたいく	1	
(4)	aみたく	7	3
	bみたくに	4	1
	cみたいく	1	
(5)	aみたく	6	2
	bみたくに	2	1
	Cみたいく	1	

「聞いたことがある」「使っている」と答えたものは十七名で全体の約二割弱に及んでいて、その数は少なくない。「みたく」が多いのは当然であるが、「みたくに」の副詞形（もしくは「みたいに」との混淆形か）も若干見えていておもしろい。「みたくに」の使用を知っているものは、(3)(4)(5)のいずれかの「みたく」の形を重複して指定して、「みたくに」が不安定なことを示している。日本での「みたくに」の形の使用は聞いていないが、「みたく」の頻度が高くなれば考えられる語形である。「みたいく」を答えたのは一名である。二三歳の三世の女子で、家庭において、秋田県出身の祖父母と二世の父母が使用していると記している。例文(2)「きれいく」と同形の形容詞活用であるが、この型が一般的でないことを示している。秋田方言との関連はブラジルではよくわからない。例文(5)は事例の少ない点が他と異なるが、活用語接続の例が、とくに推定の用法などの場合、あまり使われないのかどうかは、サンプルが少なくてよくわからない。文の難易も関係していることが考えられるので性急な判断は避けたい。体言接続の比況の用法についてならば、この形は十人に一人位の割合で使われている可能性がある。

「使っている」と答えた学生四名の環境について見ると、

(a)父母ともに使う。岡山県出身。二世、二一歳 (b)祖父と父が使う。熊本県出身（祖母は香川県出身）、二一歳、三世 (c)父母ともに使う。福岡県出身、二一歳、二世 (d)祖父母ともに使う。広島県と福井県出身、二世の父母も使う 二二歳、三世

右のごとくで、出身地域が西部に偏っているのは、移民の出身県構成の比率の反映と思われ、言語的な関係は考えられない。いずれも家庭の影響が決定的で、訛形の定着が高年齢層にすでに及んでいることを示している。

「聞いたことがある」と答えた学生のインフォマントの調査を整理すると、

祖父母・父母（熊本）、祖父母・父母（秋田）、祖母・父母（福岡）、祖母（北海道）、父母（熊本）、父母（熊本・福岡）、父（熊本）・友人（東京）、友人（出身不明六名）

ここでも、家庭での影響の著しいことがわかる。東京の友人を記した例は新しい訛形の流入とも考えられるが、その影響は小さいと思われる。二・三世の女性の一人称代名詞に「ワッチ」という形があって、よく聞かれるが、「みたく」の使用も、訛形が高年齢の一世に定着している場合に、言語規制がゆるやかだと「ワッチ」のように普及する可能性もあるであろう。

十二月八日、サンパウロより百四十キロ地点のピラル・ド・スール（Pilar do Sul）に大地主として悠々自適の生活を送っておられる盛岡包兼氏をおたずねしたが、七十歳をすぎた翁の強い高知なまりに「みたく」がしばしばあらわれて、統計の事実をたしかめることができた。もっとも、ブラジルでは、日本語教育の問題としては、日系青少年の基本的日本語能力の伸長が急務で、訛形の定着などよりも、むしろ日本語能力そのものの急激な衰退が現実化しているという事情にあることは言うまでもない。

四

関東地方における「みたく」の普及はどの程度のものであろうか。静岡県、ことにその東部・中部地域の「みたく」の使用状態の調査など早急になされる必要がある。日系コロニヤ社会の実情からもうかがえるように、言語規制がゆるやかであると容易に定着する語形であるからである。近代語法史を記述する場合、何よりも動態的な訛形の実態調査の必要が痛感されてならない。

注

（1）拙稿「『みたやうだ』から『みたいだ』へ」「国文研究」（静岡女子大学）第七号（昭和四十九年三月）参照

（2）UNIVERSIDADE DE SAO PAULO, FACULDADE DE FILOSOFIA, CIENCIAS E LETRAS

（3）当地では「日伯毎日新聞」一九七〇年二月二六日～三月七日の記事など。林知己夫編『比較日本人論』（中公新書）昭和四十八年八月

（4）例文(3)は体言接続、(4)は活用語接続の比況の用法、(5)は活用語接続の推定の用法で、ポルトガル語例文(5)も推定の意をもあらわしている。

——一九七四・一二・一〇——

付記　春日和男先生の華甲のお祝いを、はるかブラジルの地より、心から祝し奉ります。資料がないままに、小さな調査を報告いたしました。御寛恕下さいますよう。